

比喩と構想力：イエナ期フィヒテ言語論の 基底

KIMURA, Hiroshi / 木村, 博

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 人文科学編

(巻 / Volume)

96

(開始ページ / Start Page)

55

(終了ページ / End Page)

65

(発行年 / Year)

1996-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004917>

比喩と構想力

— イエナ期フィヒテ言語論の基底 —

木 村 博

目 次

はじめに

第1節 比喩の危うさ

第2節 「構想力の欺き」

第3節 構想力の深さ— 消滅による生成 —

第4節 言語の基底としての構想力

Sinnbild und Einbildungskraft

— die Grundlage der Sprachtheorie beim Jenaer Fichte —

Kimura, Hiroshi

Fichtes Sprachtheorie zu betrachten ist einen wesentlichen Charakter der Fichtesphilosophie ins klare zu bringen. Mit anderen Worten stellt Fichtesphilosophie durch die Entfaltung der Sprachtheorie ein Hauptmotiv dar. Das ist nichts anderes als das Problem des Stellenwerts des Sinnlichen.

In diesem Aufsatz möchte ich auf das Sinnbild achten. Es ist das Bild, das sinnlich ausdrückt wird. Und zwar drückt es auch den Sinn des Übersinnlichen aus. Also zeigt es das Sinnliche und Übersinnliche zugleich.

Nach Fichte ist das Sinnbild auch ein Produkt der Einbildungskraft, die zwischen dem Sinnlichen und dem Übersinnlichen schwebt und das Bild bildet. Daraus läßt sich folgern, das Verhältnis zwischen dem Sinnlichen und dem Übersinnlichen, ohne das eine für das andere aufzuopfern, als das des zweifachen Hin- und Hergehens zu begreifen.

Der vorliegende Aufsatz stellt zunächst die zweifache Seite des Sinnbilds dar, erklärt dann die Täuschung und die Tiefe der Einbildungskraft und analysiert zuletzt die Einbildungskraft als die Grundlage der Sprachtheorie von Fichte.

はじめに

フィヒテの言語論を考察すること、それはフィヒテ哲学のある本質的側面を照出することに通ずる。問題をより限定した上で別言すれば、イエナ期フィヒテの自我の哲学は、言語の問題の展開を通してみずからに不可欠なモチーフを表出しているのである。このモチーフこそ〈感性的なもの〉の位置づけの問題にほかならない。

むろん、〈感性的なもの〉は自然・他者・行為等といった問題群^①へと連なるが、本稿との連関で留意すべき点は「比喩 (Sinnbild)」である。比喩は文字通り感官の心像である。その限り、比喩は〈感性的なもの〉を端的に表す。だが、比喩は〈感性的なもの〉だけに固執しているわけではない。同時に、比喩は抽象的なもの、名伏しがたきもの、つまるところ〈超感性的なもの〉の具象化なのでもある。このことは、言い換えれば、〈感性的なもの〉と〈超感性的なもの〉との二重の拡がりをもった比喩の豊かな可能性を示している。この可能性を絶やすことなく培うことは、心像を表象し形成する根源的能力である「構想力 (Einbildungskraft)」に着目することへと不可避的に接続していく。何故なら、「絶対的自発性」としての構想力の本領は、まさに〈感性的なもの〉と〈超感性的なもの〉との「揺動 (Schweben)」のうちにあるからである。

もし、言語が形骸化した〈文字〉に墮したものでしかないとするならば、〈精神〉の把握を言語に託することなど望むべくもないであろう。その限り、言語は真理を隠蔽するものでしかない。だが、それにもかかわらず、フィヒテはいわば言語の力というべきものを捨ててはいない。言語の欠落が〈超感性的なもの〉との架橋そのものの喪失につながるからである。実に、フィヒテは、「イデーを意識にもたらし、理想を表象する能力」(GuB.318)としての精神によって「空虚で死んだ文字」(*ibd.*)を再生することを企てるのである。

以上の確認は、〈感性的なもの〉と〈超感性的なもの〉との関係を、一方で他方を解消することなく、二重の往還の関係として位置づけ直すことをわれわれに迫る。——この消息をフィヒテ言語論は解き明かす。

第1節 比喩の危うさ

比喩の奥行き深さは同時にその危うさをもあわせもつ点にある。ベルリン期以降もたびたび触れられる「比喩 (Sinnbild) の直接的明瞭さと理解可能性」⁽²⁾ は、実に、「錯覚 (Täuschung)」およびそれにもとづく矮小化と転倒性と表裏一体なのである。この点をフィヒテの論考「言語能力と言語の起源」(1795年)に照らして確認しておきたい。

フィヒテは、「もっとも抽象的な概念」(SUS.110)である「物 (Ding)」と「存在 (Sein)」とに注目する。とりわけ、これらの概念がもっている二重の意味、つまり、日常生活の中で理解されている感性的で具体的な意味と、それを超えたきわめて抽象的な意味に注目する。たとえば、知の最高の表現である「存在 (Sein)」という語は、一方で、「ich bin」、「du bist」、「er ist」というように日常語として用いられているとともに、他方で、可変的なもの (bin, bist, ist) と反対の持続するもの・共通するもの (sein) をも意味している。通常、われわれが直接意識しうる対象は可変的なもの、変化の中にあるものであって、恒常的なものは知覚の直接的対象とはならない。にもかかわらず、われわれは可変的なものにとどまりえない。変化するものは変化しないものを離れてはありえないことを間接的に知は示すからである。そこで、われわれは何か恒常的なものを求め、すべての変化をその持続するものに関係づけざるを得ない。こうして、可変なものがそこから展開されそこへと還元される、そうした恒常的なものとしての「持続する基体 (ein dauerndes Substrat)」(ebd.111)が獲得される。そして、可変的なものとその基体にかの「ist」や「sein」という語が適用される。その結果、今や、すべての変化の根底にあるこの基体なくしてはわれわれの精神のいかなる行為もいかなる言語もありえない、と主張されることになる (vgl.ebd.112)。だが、そこに「錯覚 (Täuschung)」が潜んでいることをフィヒテは暴露する。たとえば、自我は、みずからが物物的世界に対置されている限り、己を非物體的と考えざるを得ない。ところが、己を一個の対象として表象することは、われわれの外なる対象を表象する原則にもとづいて、自我を感性の形式へともたすことを意味する。一方で、知は、自我を非物體的として捉えることを欲する。他方で、そういうものとして表象する形式である構想力のほうは、自我が空間を充たし、

物的なものとして現象していることを指摘する。こうした「矛盾」を除去するために想定されたのがかの基体にはかならない (*vgl. ebd.* 113 f.) というわけである。その限り、「持続する基体とは構想力の所産にすぎない」 (*ebd.* 111f.)。

さて、このような構想力の所産としての錯覚は、二重の意味で「不可避的」である。一つは構想力のある「本性」にもとづく。もとより、構想力の働きは感性的表象と精神的理念を媒介する図式を生み出す点にある。一方で自らを非物的とし、他方で物的とする自我の自己自身との乖離は、その隙間を埋める中間者を要請する。感性的徴標をそなえた持続する基体こそその乖離を埋め合わせる結合点なのである。そして、二つめの意味は、同時にまたその錯覚によって容易に理解され得るという点にある。すなわち、図式は精神的理念を表す「記号 (Zeichen)」 (*ebd.* 113) にかならない。より厳密に言えば、図式によってこそ、単純には理解されがたい「超感性的概念」が「感性的記号」と媒介され、そこに理解可能性が拓かれるのである。ここに、「精神的理念は感性的なことばによる以外には表現されえない」 (*ebd.* 114) とするフィヒテの明確な視点を見て取ることができるであろう。

以上のような錯覚の不可避性の確認は、「比喩的表現 (die bildlichen Ausdrücke)」 (*ebd.*) の本来の意義を見定めること、そしてその裏返しとして、そうした意義を損なうような構想力を断固として拒否すべきことへとわれわれを導く。すなわち、フィヒテが目にするのは、感性的記号と超感性的概念との間の「移し入れ (Uebertragung)」 (*ebd.*) の関係なのである。たしかに、一方で他方を解消してしまうならば、そこには単なる固定化による矮小化と転倒性しか残らないであろう。フィヒテの挙げる事例にもとづいて言い換えれば、「影を表現することば」 (*ebd.*) で精神を表示することによって、精神的概念を感性的・物質的表象に擦り替えてしまう、そうした転倒性である。この転倒性が不断の流れの中に固定した感性的基体を生み出す構想力の錯覚にもとづく限り、これをフィヒテは厳しく斥ける。けれども、構想力が感性的表象と超感性的理念を媒介する働きをもつ限り、フィヒテはこれを生かす可能性を追究する。その交点に比喩がある。したがって、比喩の〈感性的なもの〉と〈超感性的なもの〉とに拡がる豊かさや理解可能性への注視は、構想力そのものの捉え返しを迫る。その限り、比喩の危うさを乗り越えその深い意義を捉えんとするフィヒテの眼差しは、比喩を生み出す構想力、ただしフィヒテ固有の

意味での「生産的構想力」に繋がっているのである。

第2節 「構想力の欺き」

前節で触れられたように、比喩的表現の意義を掴むための条件は、錯覚と転倒性を生み出す、そうした構想力を克服することであった。だが、こうした構想力の錯覚は、当代の偉大な思索家であるマイモンが「構想力の欺き (Täuschung der Einbildungskraft)」(VnL. XXV) と呼んだ事態と連動している。しかも、それは「実在性 (Realität)」の把握に直結する重要問題でもあるので、それをまず吟味しておきたい。この吟味もフィヒテ固有の構想力の照出に繋がるはずである。

さて、『新しい論理学の試み』の中でマイモンが批判する最大の対象は独断哲学である。そしてその眼目はそれらの「仮象 (Schein)」を暴露することに向けられる。マイモンによれば、独断哲学の仮象は、「理性の機能を形式的にも実質的にもその限界を超えて拡張した点」(ebd.175)にある。カント哲学も理性の機能を、なるほど実質的ではないにしろ、形式的にその限界を超えて拡張した点で同様の仮象に陥っている (vgl.ebd.), とされる。マイモンは、この観点から、因果律に対してもヒュームの懐疑論を踏まえて批判を加え、因果律に客観的妥当性がないことを主張する。すなわち、「純粋理性批判は因果性の超越論的原理を仮言判断の論理的形式から演繹した。…… [しかし] この形式はその使用に関しては欺きによって論理学に持ち込まれたのである」(ebd. XXIV)。論理学の展開の根底にある機能は、「認識能力のいっさいの機能の最高の類概念」(ebd.214 f.) としての意識一般であり、欺きは「構想力の欺き」にほかならない。それ故、意識は己の実在性を証明できない。換言すれば、「構想力はみずからのフィクションを実在的对象をして表象する」(ebd.180) にすぎない、というわけである。

ここでの論理的焦点は、主観のうちにある思惟法則を構想力によって客観の中に適用することはいかなる客観的妥当性もない単なる錯覚にすぎない、ということである (vgl.GEW.191)。

いうまでもなく、これに対するフィヒテの反論の基本にあるのは「超越論的」観点である。この「超越論的」というのは、「超越的」と厳格に区別される。後者が「世界の根拠を自我の外に求める」のに対し、前者は「世界の根拠

を自我のうちに求める」(PA①, 236) 観点である。けれども、問題は自我がいかにして世界の根拠たりうるのかである。それを自我の外に求めるのでない以上、その可能性は自我の自己限定にあることになろう。しかし、だからといって、自我が自己の殻の中に閉じこもっているだけではその課題は果たされえない。したがって、問われるべきは、自我の自己限定のための条件である。それは、「自我があるものを自己から排斥し、それによって自我が限局づけられる」(GEW.184) ことにある。ここで留意すべき点は、排斥と限局といういわば自己還帰的な往還関係である。なるほどこの排斥はまぎれもなく自我の「行い (Handeln)」である。けれども、自我は己の行いを直接意識できない。それができるのはただ己の所産を介してのみである (vgl. ebd. 188)。見られるように、フィヒテの視角は、主観のうちにあるものが客観の中に適用されるといった、いわば単線的な直線ではなく、複線的な往還に向けられている。もとより、排斥も限局も共通な領野がなくては不可能である。実に、構想力がその絶対的自発性によって産出するのはこうした共通な領野なのである (vgl. ebd. 196)。自我のみに閉じこもるのではなく、また自我以外のものに埋没するのではなく、両者を往還することによって果たされる自己合一、そこにフィヒテは真の実在性を見据えるのである。この合一が遂行される限り、「構想力は欺かない」(GWL.369)。

第3節 構想力の深さ——消滅による生成——

フィヒテ言語論の根底にある比喩と構想力の独自の意義を照出することは、逆にいえば、フィヒテにおける言語の興行きを見開くことに通ずる。この点を解きほぐす上で注目すべきは、ノヴァーリスが『フィヒテ研究』の中で示した「消滅による生成 (Entstehen durch Vergehen)」(FS.352) をめぐる解釈である。いうまでもなく、フィヒテにおいてこの「消滅による生成」は「実作用の交替 (Wechsel der Wirksamkeit)」(GWL.315) をめぐって展開されるが、その中で働く「独立の活動 (unabhängige Tätigkeit)」は交替項を可能ならしめる絶対的活動として構想力に直結する (vgl. ebd. 313 f.)。以下、この点を吟味することとしたい。

ノヴァーリスによれば、「根拠を思惟する努力」(FS.269)こそ哲学することそのものにほかならない。それ故、こうした絶対的根拠へ到達することが哲

学の課題となる。けれども、われわれの有限性の故に、絶対的根拠への到達は不可能である。にもかかわらず、その根拠を求めんとする衝動は決して尽きることがなく、永遠である。こうした事態をノヴァーリスは以下のような逆説的表現によって捉える。すなわち、「絶対的なものへの自発的な断念によってわれわれのうちに無限で自由な活動が生起する。——それこそ、……われわれが絶対的なものに到達しこれを認識することが不可能であることによってかえって見出しえる、唯一可能な絶対的なものなのである。このように、われわれに与えられている絶対的なものはただ否定的にしか認識されえないのである」(ebd.)。だから、この絶対的なものは「言いようのないもの」(ebd. 202)なのである。これをノヴァーリスは、とくに「絶対的対絶態 (der absolute Gegensatz)」(ebd.) と呼ぶ。けれども、「絶対的対絶態」は有限なわれわれの反省の「対在 (Gegenstand)」(ebd.) とはなりえない。われわれの反省を介して「対在」として把握された「対絶態」はもはや「絶対的対絶態」ではない。その限り、「対絶態」と「対在」は対立することさえできない。だが、そうであるにもかかわらず、こうしたわれわれの「対在」として把握した「対絶態」よりほかにはいかなる「絶対的対絶態」もありえない。実に、絶対的なものとは、かく限定された「対絶態」と「対在」との関係のうちにある、両者に共通する領域にはかならない。この領域は、否定による肯定、否定と肯定の交替という、そうした構想力の「漂い (Schweben)」(ebd. 266) によって可能となる。「漂いのこの光点からいっさいの実在性が放たれる」(ebd.)。つまり、漂いは、対しあう両極の間を絶えず往還することによって両極の実在性を生み出す生産的構想力の能力にはかならない⁽³⁾。

以上のノヴァーリスのフィヒテ解釈は、ベルリン期以降のフィヒテ知識学における「意識における自我の自己否定と絶対者の自己構成」⁽⁴⁾を予料するものであるというが、本稿との関連で興味深いのは、言い表しえないものをそういうものとして言い表す、そうした比喩の本性に関わる側面である。有限な意識の彼方において表現しえないものをそういうものとして表現することによって対自化し意識化すること、それは「比喩的・象徴的なことばによる詩的語り」⁽⁵⁾に通ずる。しかも、その意識化は不断に往還する活動としての構想力によってもたらされる。その限り、構想力の深みは〈超感性的なもの〉と連なる比喩の力をうちに含む言語の深さと通底しているのである。

第4節 言語の基底としての構想力

フィヒテにとって言語と構想力とは密接な内的連関のうちにある。フィヒテが『全知識学の基礎』において、「人間精神の全機制」の根底に「生産的構想力」(GWL.353)を見据え、これなくしては人間精神におけるいっさいのものは説明しえないことを指摘したことは周知のことであろう。今や、フィヒテ固有の構想力概念が明らかにされなくてはならない。

かつて、プラトナーは「想像力(Phantasie)」と構想力を次のように区別したことがある。すなわち、想像力とは「空間的に非現前のものを表象するさい、その根底にある能力」(PA.63)のことである。そして、想像力によって生み出された表象が「明瞭さに関して、傑出した完全性」(ebd.64)を備えているとき、それが構想力とみなされる。つまり、両者の区別を明瞭さに求めるわけである。これに対して、フィヒテは「想像力と構想力の区別は自由にある」(PA①.243)と考える。つまり、構想力は、自由の「絶対的自発性」を本質とすることによって、対象による拘束性からまだ免れていない想像力から区別されるのである。しかし、だからといって表象の明瞭さを犠牲にするのではない。むしろ、己の自由を意識することによってこそ、かえって、表象を「明瞭さと鮮明さにまで高める」(ebd.245)のである。

さて、フィヒテの構想力の独自性を捉えようとするならば、その構想力が単に理論的自我の能力に限定されているのではなく、本質的には実践的にも機能する根源的能力であることを確認しておく必要がある。いうまでもなく、「純粹活動」ないし「事行」としてのフィヒテの「絶対的自我」は、端的に自己を定立するのであって、非我を定立するのではない。だが、こうした自我の端的な絶対性は、己の原理の展開なくしてはむなししい抽象に終わることになる。換言すれば、「自我は自己自身を端的に定立する」(GWL.409)という命題の意味は、有限な理論的自我および有限な実践的自我を通して初めて明かとなるのである。その限り、自我の自己定立という課題の遂行は、構想力と努力が担っているのである。ただし、ここで看過されてはならない点は、かかる自我の自己定立が「われわれの外なるあらゆる実在性を独断的に否定する」(ebd.414)、そうした独断的観念論を意味しているわけでもないし、また独立した非我のみを対象とする独断的実在論を意味しているわけでもない、と

いうことである。肝要なのは、自我と非我のいずれかに固執することではなく、両者のいずれをも捉えることであり両者の連関を掴むこと、である。実に、こうした把握を実現するものこそ互いに相反しあう両規定の間を揺動する「創造的構想力」(ebd.414 f.)にほかならない。この意味で、構想力は、理論と実践に通底する根源的能力なのである。

この点を踏まえたうえで、フィヒテの構想力の揺動の規定を確認しておこう。「構想力は、一般にいかなる固定した限界をも定立しない。何故なら、構想力はそれ自身いかなる固定した立場をもたないからである。……構想力は限定と非限定、有限なもの無限なものとの中間に揺動する能力である」(ebd.360)。見られるように、構想力は、絶対的に反立的なもの、合一せられないもの、自我の把握能力に全く適合しないものがなくては決して可能ではないのである。互いに廃棄しあいさえするこれら反立的なものを揺動によって合一するということは、両者が互いに反立のままに成立しあう条件を問うことである。それが、両者のうちの一方を他方に解消するのではなく、「互いに廃棄し合わなくてはならない契機間に入り、それによって両契機を保持する」(ebd.350)能力である。これを生産的構想力が遂行するのである。

ところで、こうした生産的構想力の絶対的揺動に対して、「現実の理論的自我の立場は、かかる構想力への反省という仕方でも成り立つ」⁽⁶⁾。換言すれば、理論的理性は生産的構想力の揺動を固定する働きである。すなわち、「固定の働きは、自我のうちなる端的に定立する能力ないし理性に属している」(ebd.373 f.)。だが、理性による固定化によって構想力が消滅するわけではなく、むしろ、揺動の「この否定それ自身が、実はいっそう深い構想力の作用」⁽⁷⁾にほかならない。「構想力はその本質にしたがって、一般に客観と非客観との間を揺動する。構想力は客観をもたないようにと固定される。このことは(反省された)構想力が全く滅却されることであり、かつ構想力のこの滅却、非存在が、(反省されない、それ故明瞭な意識に上らない)構想力によって、それ自身直観される、ということである」(ebd.382)。——見られるように、生産的構想力の根源性とは、ただ根底にあるだけのことをいうのではなく、揺動の否定、固定化そのものを自ら引き受けることを貫いて不断に自己を再生していく動的展開のうちのみある、といわなくてはならない。実に、先に触れた錯覚にもとづく転倒性を克服する構想力の働きもここにある。いわば、揺動と固定のさらなる揺動ともいうべき生産的構想力によって、感性的基

体を生み出す「構想力の錯覚」もまた克服されるのである。

さて、先にも触れたように、フィヒテが「感性的記号を超感性的概念へ移し入れるのは、錯覚にその原因がある」(SUS.114)という時、そこで批判されているのは、混同と転倒化という事態であった。すなわち、移し入れによって表現された精神的概念を、当の記号がとってこられた感性的対象と混同することであり、精神的対象を物質的なものに転倒することによる固定化であった。比喩的表現が批判されているのではなく、比喩的表現の意味を看過し捉えきれていないことが批判されていたのである。この点の留意が重要なのは、フィヒテが『プラトナー講義』の中で次のように明言していることからわかる。すなわち、「言語はまずもって比喩的 (bildlich) である。つまり、言語においてはいかなる概念も感性的対象とのアナロジーにもとづいて表現される」(PA①.325)。見られるように、フィヒテは言語の比喩性をむしろ強調しているのであって、そもそも比喩的表現による以外に〈超感性的なもの〉は表示されえないのである。元来、感性的記号を超感性的概念へ移し入れることができるのも、構想力による図式にもとづく両者の同一性が確定されてのことである。換言すれば、図式は直観的・感性的心像と超感性的理念を媒介する働きを担っているのである。

かの錯覚が物や存在という語の二重の意味にもとづくというのは、比喩化の間接的意味を直接的、感性的意味に擦り替えることからおこるのであって、語のもつ二義性そのものに直接の原因があるわけではない。二重の意味を相互連関のうちに把握すること、〈感性的なもの〉と〈超感性的なもの〉という二義性を、一方で他方を犠牲にするのではなく、二重の往還の関係として捉えること、このことをフィヒテは言語の基底にある構想力を解きほぐすことによって語るのである。フィヒテのめざしたものは、感性的・理性的存在としての人間のトータルな把握であった。

引用略号

- GuB. = Fichte, J., Ueber den Unterschied des Geistes, u. des Buchstabens in der Philosophie, in: *Fichte-Gesamtausgabe*, II, 3, Stuttgart-Bad Cannstatt.
- SUS. = Fichte, J., Von der Sprachfähigkeit und dem Ursprung der Sprache, in: *Fichte-Gesamtausgabe*, I, 3, Stuttgart-Bad Cannstatt 1966. (参照, 藤澤賢一郎訳「言語能力と言語の起源」, 東京経済大学『人文自然科学論集』第68号所収, 1984年。)

- GEW. = Fichte, J., *Grundriss des Eigenthümlichen der Wissenschaftslehre in Rücksicht auf das theoretische Vermögen*, in: *Fichte-Gesamtausgabe*, I, 3, Stuttgart-Bad Cannstatt 1966.
- PA①. = Fichte, J., *Zu Platners »Philosophischen Aphorismen« Vorlesungen über Logik und Metaphysik, 1794–1812*, in: *Fichte-Gesamtausgabe*, II, 4, Stuttgart-Bad Cannstatt 1976.
- GWL. = Fichte, J., *Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre*, in: *Fichte-Gesamtausgabe*, I, 2, Stuttgart-Bad Cannstatt 1965. (参照, 木村素衛訳『全知識学の基礎』, 岩波文庫, 1985年。)
- VnL. = Maimon, S., *Versuch einer neuen Logik oder Theorie des Denkens*, Berlin 1794. (Neudrucke seltener philosophischer Werke, Bd. III, hrsg. v. der Kantgesellschaft, Verlag von Reuther & Reichard, Berlin 1912.)
- FS. = Novalis, *Fichte-Studien*, in: *Novalis Schriften*, Bd. 2, Stuttgart 1981.
- PA. = Platner, E., *Philosophische Aphorismen*, in: *Fichte-Gesamtausgabe*, II, 4 S, Stuttgart-Bad Cannstatt 1977.

《注》

- (1) 自然・他者・行為については各々以下の拙稿を参照のこと。
 「フィヒテ自然哲学の基底——構想力の揺動——」, 伊坂青司他編『ドイツ観念論と自然哲学』所収, 創風社, 1994年。
 「イエナ期フィヒテにおける言語と共同性」, 社会思想史学会編『社会思想史研究』第14号, 北樹出版, 1990年。
 「イエナ期フィヒテにおける相互人格性と言語」, 『理想』第655号, 理想社, 1995年。
 「行と行為——江渡狄嶺とフィヒテ——」, 比較思想学会編『比較思想研究』第18号, 東京書籍, 1992年。
- (2) この表現は『ドイツ国民に告ぐ』の「第4講」からの引用であるが, このベルリン期のフィヒテ言語論の詳細(イエナ期との連関も含めて)については次の拙稿を参照のこと。
 「フィヒテとラインホルト——言語論をめぐる——」, 日本フィヒテ協会編『フィヒテ研究』創刊号, 晃洋書房, 1993年。
- (3) ここで試みた「対絶態」と「対在」の関係の考察は, 拙稿「イエナとフィヒテ」(石塚正英他編『都市と思想家——ヨーロッパ思想史の断面——』所収, 法政大学出版局, 1996年)の第4節を下地にしている。なお, „Gegensatz“ は „Zustand“ (FS. 208) と言い換えられることになるが, その意味を解きほぐすことは後の課題としたい。
- (4) Janke, W., *Enttöner Gesang——Sprache und Wahrheit in den Fichte-Studien“ des Novalis*, in: *Erneuerung der Transzendentalphilosophie*, hrsg. v.K. Hammacher u.A. Mues, Stuttgart-Bad Cannstatt 1979, S.200.
- (5) *ibid.* S.201.
- (6) 大峯顕『フィヒテ研究』, 創文社, 1976年, 62ページ。
- (7) 同上 同ページ